

あさひさす窓より見ゆる富士の山

鶴瀬団地は日本住宅公団が建設した団地で、昭和32年(1957)に竣工した第一団地(33棟、230戸)、昭和37年(1962)に竣工した第二団地(66棟、1071戸)、昭和51年(1976)竣工の鶴瀬市街地住宅からなります。



鶴瀬地区の人口は、昭和32年の4,539人から昭和47年(1972)には41,782人へと約10倍に増加しました。平成に入ってから、老朽化等に対応するため、建て替えが進められ、「アルビス鶴瀬」「埼玉県営鶴瀬団地」「コンフォール鶴瀬」などへ、姿を変えました。(4)

いまままだ静かに眠るオトウカ山

ふじみ野駅西口からまっすぐ進むと左手にこもりとした林が見えてきます。これが「オトウカ山」です。「オトウカ」は「御稻荷」の字を音読みしたもので、狐が住んでいたといわれます。



この塚は、かつては、古墳であると考えられていました。しかし、発掘調査で古墳の証拠が見つからず、また榛名神社の境内に移された石祠が「富士浅間大社」と「藤塚神社」であることから、近世の富士塚だと推測されています。現在は公園になっています。(5)

うきよかなありし日のいおり影もなし

鶴馬1丁目にあった三光院は、「七沢八寺」(㊸の札)のうちの一寺でした。はじめは修験道の寺でしたが、後に天台宗に変わり、江戸時代には灌頂院(川越市古谷本郷)の末寺となりました。不動明王立像を本尊としていましたが、本堂などの建物は、昭和35年(1955)2月の火災により焼失してしまいました。



現在では、住宅街の中に残る墓地や六地藏などが、かつてこの地にあった三光院をしのばせています。(6)

えきまえに立てば都の風がふく

鶴瀬駅は、東上鉄道(東武東上線の前身)の開業とともに、大正3年(1914)に開設されました。線路際に開設記念碑も立っています。昭和52年(1977)にみずほ台駅が開設されるまでは、市内で唯一の駅でした。



当初は野菜や肥料などの運送が主でしたが、戦後、周辺の宅地化により、輸送客数が急増します。昭和33年(1958)の1日の平均乗降客数は約1200人でしたが、平成23年(2011)には約2万人となっています。昭和55年(1980)に西口が開設され、近年は駅の東西の区画整理が行われています。(7)

おくぼ氏のしゅごじんなりき 阿蘇神社

東大久保の鎮守である阿蘇神社は、創建年代が不明ですが、永正元年（1504）7月に本殿を建てた際の棟札の文面が『江戸名所図会』に掲載されています。伝承では天正18年（1590）に徳川家康が関東に入国するまで、この地を支配していた大久保次郎左衛門尉道次が、境内の脇に屋敷を構えていたといい、大久保屋敷の名が伝えられています。このことから阿蘇神社は大久保氏の守護神であったとも言われています。(v)



かぜがいう昔と今の話をば

林をテーマにした札です。かつてこの地域に散在した林は、燃料になる薪や田畑の肥料になる落葉の貴重な供給源でした。また、転入した市民にとつては散策やこ



水子の石井緑地（通称どんぐり山）。「鎌倉道」が通っている

いの場となりまし
た。
開発が進むととも
に林は失われてい
き、今や平地林はほ
んどなくなりまし
た。しかし、台地と
低地の境にある斜面
林は多く残されてお
り、その一部は地権
者の協力により「緑
の散歩道」として整
備されています。(h)

きくもの涙をさそう 庚申塔

本郷中学校の正門前の道沿いに二つの石塔が建っています。いずれも江戸時代の庚申塔です。このうち文字のみのものには次のような伝説があります。
「かつてこの近辺が鷹場だったところ、鳥猟は厳しく禁じられていた。ある時、孝行者の太郎兵衛が、病気の父の滋養のために鶴を捕ったが、露見して磔にされた。村人は孝子を哀れんで供養の庚申塔を建てた」



この庚申塔が供養のために建てられたかは不明ですが、近くの民家にも「大鳥」を捕えて磔になった「太郎兵衛」を供養する、幕末に建てられた墓標があります。
この伝説に基づき、市民による創作民話集や人形劇が作られました。(h)

くる人も行く人もよし 橋三つ

新河岸川にかかる伊佐島、南畑、木染の三つの橋は、南畑と鶴瀬・水谷地区をつなぐ主要なポイントです。市役所と南畑地区の中心部を結ぶ南畑橋は、江戸時代に架橋されていた唯一の橋で、そのほかの地区は5カ所の渡し場で結ばれていました。市の北端に位置する伊佐島橋は、昭和初期に行われた耕地整理に伴い架橋され、市の東南にかかる木染橋は昭和34年（1959）に完成し水谷地区と南畑地区を直結しました。(h)



伊佐島橋



南畑橋



木染橋

④ せぬこと多く残りし地名かな

東大久保には街道でないにもかかわらず金子街道と呼ぶ地名があります。「街道」は樹木などで囲まれた屋敷地を指す「垣内」の転化とされ、金子高範（難波田氏の祖）が屋敷を構えていた場所であったと推測する説があります。屋敷付近にあったという天神祠が、新河岸川放水路に架かる三本木橋の近くにあります。昭和61年（1986）に完成した放水路の敷地にかかったため、現在の場所に移されましたが、以前は、三本木橋の西側（上の写真の水面付近）にありました。(g)



⑤ さみしくもコロボツクルの碑が二つ

第3保育所の園庭に接して、石碑が立っています。かつてこの付近は貝塚山と呼ばれ、小山のように盛上がつた上に稲荷がまつられていました。明治40年（1907）にここを訪れた考古学者は、畑に散る土器や石器を、アイヌ人の伝説に登場する先住民のコロボツクルが残したと解説しました。翌年、稲荷が移転した跡を開墾すると、古墳時代の刀や人骨が見つかりました。発見者は、刀を皇室博物館に納め、人骨は諏訪神社の境内に再埋葬しました。そして記念碑を建てました。市指定文化財です。(h)



裏面の碑文

⑥ けむせり五輪の墓や性蓮寺

大字水子字正網しょうあみにある性蓮寺は、市内で唯一の日蓮宗の寺院です。墓地の奥に古い五輪塔が立っています（上から3段目に宝篋印塔ほうきやくいんとうの笠が混じる）。台座に銘文があり、かつては「天正五年」（1577）と読めたと伝わります。「上田周防守」の名もあります。

上田氏は、難波田氏が衰えたあとにこの地域を治めた一族で、永祿2年（1559）の文書に、鶴馬・水子・難波田（南畑）の領主として「上田左近」が記されています。周防守も難波田城主だったと伝わっています。(h)



⑦ し舞の音頭うれしき村はずれ

富士見市には2つの獅子舞が伝承されています。鶴馬諏訪神社獅子舞（渡戸組獅子舞）と南畑八幡神社獅子舞です。ともに3匹の獅子が1組になり、舞の構成・歌詞がほとんど同じである、などの共通点があります。双方とも由来は定かではありませんが、江戸時代の末には行われていました。どちらの獅子舞も昭和30年代（1960頃）に後継者不足から中断しましたが、十数年後に、地域の人々の努力によって復活し現在に至っています。(i)



諏訪神社獅子舞



南畑八幡神社獅子舞

す でにいま時代の遺物 長屋門

長屋門は、門の両側に部屋が付いた細長い建物です。本来は武家屋敷で家臣を住わせるためのものでした。次第に寺院や名主級の家にも建築が許されるようになり、明治以降は他の有力な家でも建てられました。市内では寺院に2例、民家で7例あります。このうち針ヶ谷の鈴木家の表門は難波田城公園に移築され、今も現地に建つ東大久保・大澤家の表門とともに市指定有形文化財になっています。(h)



東大久保・大澤家の表門



旧鈴木家表門（主屋側から）

その昔、ナマズ、ウナギやフナ、ドジョウ

権平川は、鶴瀬団地の西に水源があり、逆S字状のカブを描きながら鶴瀬東とおり、来迎寺の崖下の低地で富士見江川と合流します。かつては清流が多く、生命をはぐくみ、魚も手づかみでできたといわれています。今では流域のほとんどが宅地化し、暗きよとなった部分も多くなりましたが、鶴馬1丁目付近に、かつての様子をしのばせる風景が残っています。(h)



せ ちがらぎ世にすがしがし 石仏

市街化が進んだ今も、市内の道ばたに多くの石仏が立っています。庚申塔、馬頭観音、聖観音、地藏などです。

これらの石仏が盛んに作られ始めるのは、江戸幕府四代将軍家綱の頃からです。城の石垣づくりから解放された石工たちの新たな仕事だったともいわれます。

風雨にさらされたからか、元々なのか、その柔和な顔を眺めると天下泰平の気分になってきます。(h)



諏訪1丁目の道ばたにある馬頭観音
寛文4年(1664)に作られた

た ち行きしあとに残りし羽の数

羽沢1丁目にはS字のように曲がる谷があり、かつて沢であった様子がうかがえます。この「羽沢」を流れる湧水は、その昔にあった西蔵寺という寺院のそばから湧いていたといわれています。羽沢という地名の由来には、いくつかの説があります。その一つは、沢で水鳥が群れをなす様子が、羽根を

しいてあるように見えたという説、他には鶴や水鳥が飛び去った後、抜け落ちた羽がたくさん見られたからという説もあります。(h)



ちめいにも残るはうれし地蔵山

かつて大字水子の畑に小さな塚があり、上に石地蔵が立っていました。付近は地蔵山と呼ばれました。塚のふもとを通る道は、鶴馬から引又町（志木市）への往来に使われました。水子の道標の前を通る道です。今では塚は失われ、地蔵は大応寺に移りました。目の前に広がった一面の畑は区画整理されて「東みずほ台」になりました。土地の歴史や伝説と結びついた地名が、少しずつ失われていきます。(h)



つわもののおたけびの声いま何処

南北朝の争乱のさなかの観応元年(1350)、足利尊氏の弟直義ただよしが、尊氏と争い始めました。翌年、状勢不利となつた直義は鎌倉に逃れました。尊氏方の軍勢は3方向から鎌倉へ進軍しました。このうち高麗経澄つねすみが率いる軍勢は、羽根倉はねくらで入間川（現・荒川）を渡りました。これを迎え撃つたのが難波田九郎三郎らでした。合戦は経澄の勝利となり、九郎三郎は討死しました。しかし、この合戦の記録により、難波田氏は初めて歴史にその名を残すこととなったのです。

この合戦が行われた正確な場所は不明ですが、荒川西岸にある富士見市運動公園付近（写真）が想定されます。(h)



てらの門かねつきどうや大応寺ゴーン

水子にある大応寺は真言宗智山派の寺院で、創建は室町時代にさかのぼるともいわれています。境内にある山門には鐘が吊るされ、鐘楼を兼ねています。ここには寛延4年(1751)の銘文が記された鐘がありました。しかし、戦時中に軍に供出されてしまい、鐘楼のバランスを保つために、同じ重さのコンクリート製のものを吊りました。昭和47年(1972)、新たな鐘が作られて鐘楼に吊されました。(v)



とりだせば最古に古しセキヤマ式土器

打越遺跡おつこは、みずほ台小学校付近に広がっています。昭和14年(1939)に、縄文時代前期の関山式せきやま期の住居跡が発見されました。当時発見されていた住居跡の中では最古級のものでした。

その後、考古学の進展とともに最古の座は奪われました。しかし、昭和47年(1972)から始まった継続的な調査で、縄文時代早期〜前期の集落跡や「打越式土器」と呼ばれる独特の土器など、重要な発見が相次ぎ、あらためて、全国的に著名な遺跡になりました。(h)



ならびたる百観音やあなうれし

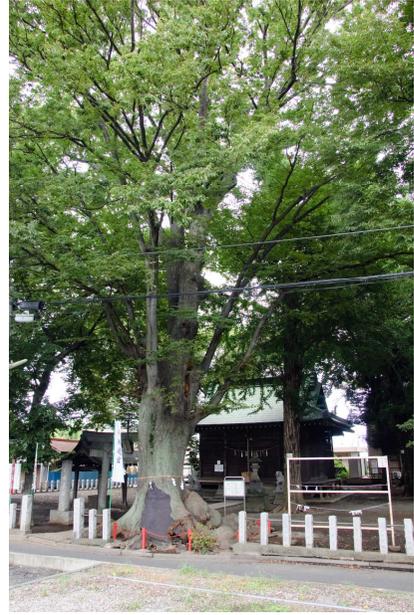
上沢2丁目にある上沢薬師堂の百観音は、西国三十三か所・坂東三十三か所・秩父三十四か所の各寺院の本尊を石に刻んだものです。大きさは高さが51〜57cm、幅が23〜27cmです。近くに住む大曾根家が三代をかけて百か所の札所を巡り、文久（1861〜1864）の頃に満願を迎えました。そして、



多くの人がその功德を得られるよう、この百観音の建立を発願しました。上沢をはじめ近隣の村々の人々から寄進を受けて建立を進め、明治2年（1869）に100体がそろいました。(v)

ぬかげばあくえきたいさん諏訪神社

諏訪2丁目にある諏訪神社は「おすわさま」として親しまれ、悪病除け、厄除けなどの守り神として信仰を集めています。東京都東久留米市、清瀬市をはじめ所沢市、新座市、ふじみ野市、富士見市内に敬神講が組織されています。毎年8月27、28日には例大祭が行われ、敬神講の代参者が参拝するほか、渡戸地区の獅子舞や里神楽などが奉納されます。



境内にある大ケヤキは高さ約20m、直径約2mあり、推定樹齢約500年と推定されています。市指定天然記念物です。(v)

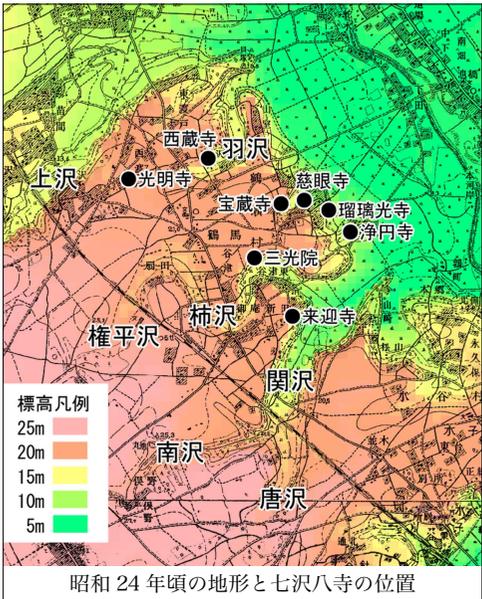
にまいたつ板碑が語る昔をば

板碑は、死者又は自身の供養のために作られた石造物で、仏を表す梵字や作られた年などが刻まれています。勝瀬の護国寺には高さ約3mの板碑が2基あります。そのうち1基は、上部に阿弥陀如来、その下に勢至菩薩（左）と観音菩薩（右）を表す字が彫られています。もう1基は、金剛大日如来（異説あり）と阿闍如来の二字が彫られています。板碑の形状が初期の特徴を持つこと、同じ境内に形が良く似た建長4年（1252）の板碑があることから、これらは市内最古、鎌倉時代中期に作られたものとされています。(v)



ねもやらず七沢八寺まごたちに

鶴馬にあった景勝地、旧跡を七沢八寺といわれています。七沢は、上沢、羽沢、関沢、柿沢、権平沢、唐沢、南沢を指します。沢は谷の意味で、砂川や富士見江川が武蔵野台地に刻んだ谷の呼称です。八寺は来迎寺、浄円寺、瑠璃光寺、光明寺、三光院、西蔵寺、慈眼寺、宝蔵寺を指します。江戸時代の『新編武蔵風土記稿』にはこれらの寺について記されていますが、現在では来迎寺、浄円寺、瑠璃光寺のみが続いています。(v)



のぎさんの書いた碑のある氷川様



水子の山王坂の氷川神社は、旧水谷村の村社で、祭神は素戔鳴尊すさのおのみことです。大宮の氷川神社を分祀したと伝えられています。神社の創建時期は不明ですが、かつての社殿の棟札に「弘治元年(1555)四月五日再建」とあり、それ以前に創建されたと考えられます。境内には日露戦役従軍者の忠魂碑があり、陸軍大將乃木希典のみまきすけが揮毫しています。明治41年(1908)、水谷村の軍友会により建てられ、同村の戦没者6名を追悼するとともに生還者約40人の名も刻まれています。(1)

ひのめみたる字針ヶ谷の遺跡かな



昭和46年(1971)、浦和所沢バイパスの工事中に弥生時代の遺跡が発見され、発掘調査しました。南通遺跡みなみのみやまです。昭和56年(1981)から、針ヶ谷小学校の建設予定地を調査したところ、弥生時代の住居跡が200軒以上も発見されました。これを記念して、針ヶ谷小の正門内には、住居跡の骨組が復元されています。その後、針ヶ谷コミュニティセンター付近きたしりわりの北通遺跡からも、弥生時代の大きな墓と、副葬品の鉄剣が発見されました。(2)

はる四月十日のまつりは榛名様

勝瀬の鎮守である榛名神社は「はんなさま」として親しまれている神社です。祭神は埴山姫命はにやまひめののみことと豊受姫命とようけひめののみことの二柱の女神で、農業の神としてまつられています。群馬県の榛名山にある榛名神社とは関係がなく、そこから勧請かんじようされてきた形跡はありません。毎年4月10日の祭礼の日には、里神楽や勝瀬囃子かたせなうたが奉納されています。植木市が開かれるほか、多くの出店が立ち並び、にぎわいを見せます。(3)

ふじみ市の文化のほこり水子貝塚



「はんなさま」のにぎわい (生涯学習課提供)



同 勝瀬囃子



水子の大応寺の前の畑は、耕せば貝殻が出てくることから、貝畑と呼ばれていました。昭和12年(1937)に最初の調査が行われ、貝塚の下には住居跡があり、縄文時代前期の環状集落跡であることがわかりました。そして、近くまで海が広がっていたことを証しました。昭和44年(1969)に、国指定史跡に指定されました。海無し県の貝塚では第1号でした。多くの市民の協力を得て整備を進め平成6年(1994)に水子貝塚公園としてオープンしました。天気の良い日には多くの市民がくつろぐ姿を見ることができます(4)

まならぬ時代のかげのつゆのあと

慶応4年(1868)、上野寛永寺に立てこもった彰義隊を新政府軍が追い落しました。その後、南畑の興禅寺に十数名の集団が押入りました。彼らは彰義隊の残党で、1人は難波田氏の子孫と名乗りました。付近の資産家に金品を強要しましたが、駆けつけた新政府軍に捕えられ、鶴馬と南畑の境にある錫杖権現しやくじくげんの前で処刑されました。興禅寺にはこの経緯を記す地蔵じぞうが建てられ、歴史に翻弄ほんろうされた人々を供養しています。(h)



錫杖権現



供養する地蔵

みは一つ五辻まもる地蔵尊

並木の地蔵は、みずほ台駅近くの並木交差点(東みずほ台1丁目)に面して立っています。台座の高さが1.3m、地蔵本体の高さも1.3mあります。現在の並木交差点は2本の道が交差するだけの十字路ですが、みずほ台駅が整備される以前は、地蔵の右側へ斜めに進む道がもう1本あったので、この場所は五又路でした。この地蔵は、8代将軍徳川吉宗の時代、享保8年(1723)11月14日に建てられました。(g)

へたながら声たからかに音頭かな

富士見市ではこれまで4曲の踊り用の曲が作られてきました。1曲目は昭和42年(1967)に作られた「富士見音頭」、2曲目は昭和50年(1975)に作られた「ふじみおどり」です。現在の「ふじみおんど」は市制施行10周年を記念して昭和57年(1982)に作られました。平成14年(2002)には、市制30周年を記念して「富士見がふるさと」が作られました。



これらの曲は、富士見ふるさと祭や地域のまつりで流され、踊る市民の輪をつなげています(写真は平成24年の富士見ふるさと祭。秘書広報課撮影)。(i)

ほりもよくほざいもうれし板碑かな

板碑とは、死者の供養や、生前に自身の冥福を祈るために作られた石造物で、多くは平たい形をしています。鎌倉時代から戦国時代にかけて多く作られました。板碑の表面には、梵字ぼんじなどで表した仏、作られた年、供養の対象者の名前などが彫られます。南畑新田にある登戸のぼりどの板碑は、江戸時代に建てられた慈光院という寺の跡地にあります。近くで見つかったものでしょう。市内最古の板碑で、建長4年(1252)の銘があり、阿弥陀如来を示す梵字が刻まれています。元は3m近くあったと推定される大形の板碑です。(f)



むらはずれ 残れる石の道しるべ

水谷中学校の前の道を東へ700m程進むと、左手に、天保14年(1843)に建てられた道標があります。江戸時代の道標は石仏に刻まれたものがほとんどですが、これは純粹な道標です。四面に(南)「ひき又 十五丁」、(北)「川こへ 三里半」、(西)「所さわ 三里半」、(東)「山下川岸 三丁」と刻まれています。引又は、志木市役所の近くにあった河岸です。山下河岸は現在の木染橋の下流にあった河岸で、この河岸の廻船問屋であった山田屋が道標を建立しました。この道標から、河岸場と村々を往来する荷車の姿が想像できます。(1)



もはやいま 知る人もなく 犬の塚

かつて、大字水子字西小原(現東みずほ台3丁目付近)に「犬の墓」と呼ばれる小さな塚がありました。この塚のいわれには次のような伝説があります。一つは、難波田弾正が鎌倉へ犬を使いに行ったが、帰り着く前に死んでしまい、その供養のために塚を作ったというものです。もう一つは、般若院現・水宮神社の修験者が京都の聖護院へ上った時に犬も連れて行ったが、帰る途中で死んでしまい、直後に修験者も亡くなり、一緒に葬ったというものです。「犬の墓」にあったこの修験者の墓は、現在大応寺内の墓地に移されています(写真)。(1)



めずらしや まるぼり庚申 興禅寺

下南畑にある興禅寺は曹洞宗の寺院で、古くは光禅寺と書いていました。江戸時代には寺子屋が開かれ、寺の住職が村の子弟の教育につくしました。興禅寺の庚申塔は背面も立体的に彫った丸彫りの形状で、青面金剛と踏みつけられた邪鬼が彫り出されています。邪鬼の下の台石には「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿が浮き彫りされています。富士見市内では41基の庚申塔が確認されていますが、丸彫りのものはこれだけです。(1)



やまならぬ 田の中にある 御舟山

勝瀬の榛名神社の南側に「お舟山」と呼ばれる高まりがあります。その地名の由来には様々な伝説があります。

どの伝説にも共通しているのは、榛名大権現が舟に乗ってきて、その舟が沈んだ場所であるという事です。異なっているのが、舟に乗っていたお供です。鷺森大権現、谷田薬師如来、貝塚稲荷などで、それぞれが近くの神社や石仏と関連付けられています。

現地には榛名神社の氏子会により案内板が建てられています。(1)



ゆめかなしむさしの武士の城の跡

難波田城は、承久の乱(22)に鎌倉幕府側で参戦し、討死した金子高範を祖とする難波田氏の拠点でした。戦国時代に三重の堀を持つ大規模な平城に改修されました。天文15年(1546)の河越合戦で難波田弾正が小田原北条氏に敗れると、北条氏の支城となりましたが、一時は岩槻の太田氏と奪い合いになりました。天正18年(1590)に北条氏が滅亡すると廃城となりました。



城跡は5万㎡以上と推定され、そのうち約1万7千㎡が難波田城公園として整備されています。写真は平成18年(2006)6月に撮影したもので、水に囲まれた難攻不落の城をほうふつさせます。(v)

よき水の つきることなし 泉かな

富士見市の地形は、西側の武蔵野台地と東側の荒川低地に分れます。台地の標高は20〜30m、低地は5m前後です。台地には富士見江川の谷を筆頭に、大小の谷が切込んでいます。谷奥や、台地と低地の境の崖に多くの湧水があります。これらの湧き水は武蔵野台地に降った雨水が地下水となって流れてきたものです。水温は一定で、めったに途切れません。



水子・東小原の「神井戸」



水子・正網の「御井戸(大井戸)」

生活に欠かせない水に富むこの地域には、太古から多くの人々が暮し、泉に感謝してきました。(h)

らんぎつな世にも絶やすな文化財

昭和41年(1966)、文化財保護委員会(現・文化庁)により、文化財愛護シンボルマークが制定されました。そして文化財愛護運動を推進しました。富士見では、そのような官製の運動には頼らず、市民による文化財の保存の動きが進んでいました。その一つの姿がこの富士見文化財かるたでした。読み句の作者は、この句に自分たちの思いを込めたのだと語っています。



平成24年扇凧づくり講習会記念写真

文化財かるたが作られた頃、扇凧おうぎだこや獅子舞など戦後に途絶えていた無形文化財も復活しました。しかし、現在再びその継承が危ぶまれています。文化財は不断の努力によつてのみ伝えていくことができるのです。(h)

りきみたる顔、まっかつか力石

力石とは、主に神社の境内に置かれ、若者たちが力比べのために用いた石です。多くは卵状の自然石を用いています。諸願成就のために重量、氏名などを刻み奉納したこともあったといえます。また、石が持ち上がるか否かで占いに用いた例もあります。



市内では現在、南畑八幡神社、榛名神社(写真)などで見られます。江戸時代後期〜明治時代のもものが多く、重さは二十六貫(100kg)から五十貫(190kg)と刻まれています。(i)

るりこう寺薬師如来とカヤの木と

諏訪1丁目にある瑠璃光寺は、天台宗の寺で薬師如来を本尊としています。創建年代は不明ですが、初代住職の実門が安元2年(1191)に亡くなったということから、平安時代末期の創建といわれています。

境内にあるカヤは樹高約23m、樹径1.5mあり、樹齢は約500年と推定されています。市内やその周辺でも最大のカヤで、市の天然記念物に指定されています。(4)



るの音は過ぎにし昔新河岸川

新河岸川(しんがし)舟運は、正保4年(1647)に、川越藩主松平伊豆守信綱により整備され、江戸の発展とともに盛んになっていきました。市内には伊佐島河岸、蛇木河岸(うづら)、本河岸、鶉河岸、山下河岸、前河岸の6カ所の河岸が作られました。江戸への荷物は米、麦、醤油、そうめん、木材など、江戸からの荷物は綿、衣類、紙、酒、肥料などでした。大正から昭和にかけての河川改修で水量が低下したことに加えて、大正3年(1914)の東上鉄道開通によって、陸上交通に取って代わられたため、舟運は姿を消しました。(5)



木染橋下流の新河岸川。右奥付近に山下河岸跡がある

れんざして年貢まけさす義民団

大正11年(1922)、第一次世界大戦後の不況下、南畑村の生活も厳しさを増していました。小作農は地主に小作料の引き下げを求めました。村内の地主は要求に応じたものの、志木町にいた南畑村最大の地主は、要求に応じませんでした。



今も豊かな水田が広がる南畑地区

その土地を借りていた小作農は連携して、小作地をすべて返納・休耕し対抗しました。そして争議中は、荒川の改修工事に従事したり、組合内で仕事を融通しあうなどして生計を立てました。そして2年後、ついに最大の地主も小作民の要求を受け入れました。(4)

わが市の中学校は遺跡あと

昭和31年(1956)、鶴瀬・水谷・南畑の3村が合併して富士見村となりました。中学校も統合し、富士見台中学校になりました。35年(1960)、村の中心に近い舌状台地の「殿山」で新校舎の建設工事を始めたところ、貝塚が発見されました。発掘調査をすると、縄文時代と奈良時代の集落の跡が発見され、「殿山遺跡」と名づけられました。



調査後、校舎が建築され、46年(1971)に本郷中学校が開校するまで村内(↓町内↓市内)唯一の中学校でした。63年(1988)に校舎を建て替える際も、発掘調査で戦国時代の堀の跡が見つかりました。(4)

を くにざかい 国境を むかひ みおろすごとく 来迎寺

鶴馬2丁目にある来迎寺は天台宗の寺院です。宝暦年間（1751～63）に寺子屋が開かれ、明治5年（1872）の学制発布を受けて、翌年に勝瀬・鶴馬・水子・針ヶ谷・上南畑・下南畑・南畑新田の7村が共同で鶴馬学校を開設しました。寺は富士見江川の谷に面した崖上に位置しており、江川と荒川低地を見渡すことができました。「国境」は、この付近にあった鶴瀬村、水谷村、南畑村の3村（昭和31年に合併して富士見村となりました）の村境を指しています。(v)



本書は、昭和47年(1972)に製作された『富士見文化財かるた』で取りあげられた市内の45カ所の文化財(歴史的建物)について、平成25年(2013)現在の姿をまとめたものです。

富士見文化財かるたは、ふじみ版画の会が製作し、文化財の選定とその解説文は、同协会会员であり、富士見郷土史同好会の会員でもあった伊藤正和氏が担いました。

昭和48年(1973)に、同かるたの解説書としての性格も持つ『ふじみの散歩道』が富士見郷土史同好会により製作されました。解説文は、同协会会员が分担し、当時の写真も掲載されています。昭和55年度(1980)には、イラストマップが作成されました。駅や道路の増設による変化はありますが、各文化財のおおよその位置を知るためであれば、今でも最も分りやすい地図です。

難波田城資料館は、平成25年秋季企画展として『郷土カルタの富士見』を開催しています(10月19日～26年1月13日)。この展示では、展示図録は作成していませんが、印刷された資料の要望があることから、内製のパンフレットを作成することにしました。展示内容が大きく2つに分れるためパンフレットも2種製作しました。本書は、そのうち「文化財の現況」コーナーのパネルをまとめたものです。

展示は、早坂廣人を主担当とし山野健一と田ノ上和宏が補佐しました。本書に収録した解説文の執筆と写真撮影も3名で分担しました。

かるたの読み句の趣旨について、伊藤正和氏から多大な御教示をいただきました。季節的なイベントの写真は富士見市秘書広報課および生涯学習課から提供を受けました。ここに記し感謝申し上げます。

平成25年秋季企画展解説資料②

富士見文化財かるたの
文化財の現状

発行日 平成25年11月16日

発行者 富士見市立難波田城資料館

〒354-0004 富士見市下南畑568-1

TEL 049-253-4664

富士見の散歩道

『ふじみの散歩道』付属イラストマップ（昭和55年度（1980）に作成された）

